

<2017年7月>

お天道様が見ているよ

国保連合会囑託 ひがしだ 東田 みみお 文男



母親の自転車に乗せてもらおうと、必ず自転車を止める場所があった。そして口をなにやらもぐもぐさせた後、ぴよこんと頭を下げて田舎道を立ち去るのである。その場所に質素な祠があり、赤い前掛けをしたお地蔵さんが中に座っているのに気付いた。小学生のころだったろうか▼日々の幸せに感謝しながら、家族の健康や安全を祈っていたのだろう。説教じみたことは言わない母親だったが、一つだけよく口にした言葉があった。「悪いことはしたらあかんで。お天道様(てんとうさま)が見てるんやから」▼ある新聞のコラムで「お天道様」という言葉に久しぶりに出くわした。「人がいなくなっても、空の上のほうからいつも神さんはあんたのことをじっと見ているんやで」。諭すように



話す母親の言葉を聞くたびに、幼心に何か特別な眼差し(まなざし)に見つめられていることを感じたものだ▼「悪いこと」の中には、もちろん法律的にはいけないことが含まれている。でも、それだけではないだろう。こちらが年を重ねると母親の言葉も少し変わった。「お天道様に顔向けできる生き方をしてや」▼自分の良心に恥じない生き方をして、ということだろうか。「良心」などという難しい言葉は使わなかったが、そんな願いもあったかと思う。話は飛ぶが、昨今の国会の議員さんや官僚の答弁を聞くにつけ、彼らの心の中のお天道様のありようが気になる▼日本人は仏様や神様にいろんな願い事をする。誠に自己中心的で身勝手であるとは思う。しかし、心のどこかに自分に恥じないよう自分を見つめる眼差しを意識しているように思う。「お天道様が見ている」。失いたくない日本人の素朴な感覚ではないだろうか。